

原 著

看護学生の高齢者理解のための視聴覚教材の評価： 生活史インタビューで構成した試作教材の有用性

Evaluation of audiovisual material prepared for nursing students' understanding of older people :
Usefulness of test production material with life history interview

浅井さおり¹⁾ 小泉未央²⁾ 沼里礼美³⁾ 金子昌子¹⁾
Saori Asai¹⁾ Mio Koizumi²⁾ Reimi Numari³⁾ Kaneko Shoko¹⁾

- 1) 獨協医科大学看護学部
 - 2) 獨協医科大学大学院看護学研究科修士課程
 - 3) 前獨協医科大学看護学部
- 1) Dokkyo Medical University School of Nursing
 - 2) Dokkyo Medical University Graduate School of Nursing
 - 3) former Dokkyo Medical University School of Nursing

要 旨

【目的】生活史を活用した高齢者理解を深める授業教材として、研究者が試作した視聴覚教材の有用性を検討することを目的とした。

【方法】研究には協力の同意が得られた施設入所中の A さんの生活史と現在の生活に関する半構成的インタビューから作成した 11 の話題からなる 12 分の試作教材 DVD（以下 DVD 試作版とする）を用いた。看護学部 1 年次生 16 名に、DVD 試作版視聴後に自記式質問紙調査を実施した。DVD の時間や内容の適切さに関する回答は統計的解析を行い、高齢者理解と重要と思う高齢者ケアに関する記述は内容分析を行った。

【結果】対象者の 87.5% が DVD 試作版を高齢者へ関心をもてる内容と評価したが、高齢者を理解するためにわかりやすい内容と回答した者は 50.0% で、祖父母との同居経験や身近な高齢者と接する機会の有無とは有意な関連を認めなかった。高齢者理解と重要と思う高齢者ケアに関する記述には DVD 試作版の 10 の話題から A さんの言動が引用されていた。また、対象者は、A さんのこれまでの生き方だけでなく、現在の A さんの理解にも生活史を活用していた。対象者の高齢者理解には、A さんの言動を解釈して理解しようとするものと自分の考えや生活状況を基準に理解しようとするものがみられていた。一方では A さんの語りが理解できないという捉えもみられていた。

【考察】半構成的インタビューによる DVD 試作版は、限られた生活史情報から高齢者を理解する実践的な能力を育成する事例教材として有用であり、DVD 試作版視聴による個人学習後、授業で A さんの語りの捉えなおしを行う取組において有用に活用できる可能性が示唆された。

ABSTRACT

[Objective] To evaluate the usefulness of the test-DVD developed by authors to promote nursing students' understanding of older people by watching their life histories.

[Material and Method] The test-DVD was a 12-minute video of a semi-structured interview on the life history of Mrs. A, an older resident, and her recent daily-living conditions. A self-reporting questionnaire survey was conducted with 16 first-year nursing students after they watched the DVD. Quantitative data, such as their perceptions of the content's adequacy of the test-DVD were analyzed statistically, and qualitative data of their understanding through description of older people and related care that were considered important were analyzed using content analysis.

[Results] Of the respondents, 87.6% evaluated the test-DVD as an interesting tool to understand older people. However, 50.1% of them evaluated the test-DVD as "easy to understand." Both subjects' evaluation of interest and understandability of the test-DVD showed no significant relationship either in the difference in living experience with grandparents or close contact experience with older people. Respondents referred to Mrs. A's acts in 10 of the 11 topics of the test-DVD in their descriptions of their understanding of older people and of older people care that were considered important. Respondents also used her life history to understand her present life and the thoughts expressed by Mrs. A. There were two ways of understanding Mrs. A's interview; trying to interpret Mrs. A's acts, and trying to understand based only on the respondents' own experiences. Some stated that they didn't fully accept her points of view.

[Discussion] These results concur that the test-DVD of semi-structured interview is a useful educational tool for training nursing students to practically understand older people. The test-DVD is expected to work well while beginning student educational programs along with existing and related exercises.

キーワード：生活史，高齢者理解，視聴覚教材，評価研究

I. 諸言

高齢者を理解する手がかりのひとつに生活史があり、現在の高齢者のありようには人生の歴史と経験のありようが大きく影響を与えているといわれている¹⁾。高齢者がこれまでの人生で様々な出来事に対処してきた経験は、現在その人が体験している困難に立ち向かう時の助けとなるものであり、看護者は人生での体験を知ること、その人が持つ力を知ることができる²⁾。また、高齢者の生活史の語りを通して、看護者はこれまでの生き方から培われた価値や望みを知ることできる。生活史は看護師が現在を生きる高齢者の理解を助ける情報であり、看護実践に生活史を活用する能力を育成する教育が重要である。先行研究では、学生の高齢者理解を目的として身近な高齢者へインタビューするレポート課題学習³⁻⁸⁾や高齢者へのインタビュー課題の後に演習で高齢者理解を深める取り組み⁹⁾が報告されているが、実際に高齢者と

接する前の講義・演習で高齢者を理解する能力の育成も重要と考える。

学生の興味関心が高まるように、講義・演習で看護と関連づけた事例を用いる等の教育方法の工夫が提言されてきているが¹⁰⁾、高齢者理解に関する講義・演習では、以前より高齢者を主人公とした映画やドキュメンタリー映像¹¹⁻¹⁴⁾などの視聴覚教材が用いられてきている。映画には、内容だけでなく背景の社会描写に豊かな学習資源を含むこと、また個々の映画によって教材化の視点が多様なため教員の意図によって自由に活用できるという利点がある一方で¹⁰⁾、映画上映に2回分の講義時間を要すること^{11,12)}が報告されている。また、教員の教育的意図に合致する既存メディアがないことで、意図に合わせて既存メディアを編集して教材とすることも報告されている¹³⁾。映画・ドキュメンタリー映像は、高齢者と高齢者を取り巻く環境に関する詳細な情報を提供するため、その人を多角的

に捉えることを必要とする課題に適しているが、看護実践への生活史の活用を課題とする場合には、生活史に焦点をあてた内容で、1回の講義時間で知識の提供と共に活用できる短時間の事例教材が有用と考える。

今回我々は、講義・演習において、生活史情報を高齢者理解に活用するための思考方法を学ぶ教育プログラム開発をめざし、プログラムのための教育教材作成を試みた。教材作成は、高齢者へのインタビューによる教材DVDを試作し、教材DVD（以下DVD試作版とする）が高齢者理解につながる内容となっているかどうかをDVD試作版視聴による調査で評価する方法をとった。本研究は、研究者が試作した視聴覚教材の有用性を検討することを目的とする。

II. 用語の定義

本研究では生活史を、事実的内容と、話を聞く人との相互作用の中で、高齢者が自分の人生を再構成して生成したライフストーリーとして語られる人生の体験の両方とした。中野ら¹⁵⁾は、過去の経験を語る時の想起の起点となるのは「現在」であるが、現在という時間にも、インタビューをしているその時を示す場合もあれば、最近のことが現在として語られる場合もあると述べている。本研究では、看護の対象者である高齢者理解を検討することから、対象者から語られる最近の生活を現在とし、それ以前の体験を生活史と捉えることとした。

III. 方法

1. 研究デザイン

本研究は評価研究とした。

2. 研究対象者と研究期間

A大学看護学部1年次生102名を対象に、学内に研究協力募集のポスターを掲示するとともに、授業終了後の時間に文書を用いて協力依頼を実施し、協力が得られた者を研究対象者とした。研究期間は2014年4月15日から2015年3月31日であった。

3. 教材作成

1) 教材の内容検討

教材は、90分の講義時間で活用することを想定し、高齢者の生活史の語りによる15分程度の視聴覚教材とした。教材内容は、木下ら²⁾を参考に、生きてきた歴史があって高齢者の今があるという考えに基づき検討した。高齢者が自分について語りやすいように、インタビューは半構成的インタビューとし、インタビュアーは高齢者となじみの看護師とした。インタビューガイドは、研究協力者の高齢者から生活史の情報提供を受けた上で研究者と協力を得られた看護師で検討し、「ここは頑張った、と思うのはいくつぐらいの時か」「どんな風に頑張ってきたか」などの生活史と、「今の生活はどうか」「どんなことが楽しく感じるか」「今の生活で支えになっていることは何か」「もし、昔に戻れるとしたら、やり直してみたいと思うか」「これからどんな生活していきたいか」などの現在の体験で構成した。

2) 協力者の選定

生活史を語ってもらう高齢者は、老いの自覚がありながらも比較的自立して生活し、過去の生活や思いを語れる方とした。具体的には要支援～要介護1程度の認知症の既往のない75歳前後の方で、なじみの関係の看護師がいる高齢者であることも条件であるため、介護保険施設入所もしくは通所サービスの利用者を想定した。しかし、研究協力を得られた介護老人保健施設で紹介可能な高齢者が軽度認知症のある入所者であったため、研究者が面接をして意図する語りが可能と判断した上でその方をインタビュー対象者とした。協力を得られたAさんは75才女性で、中学卒業後家業を手伝い、結婚後は早くに夫と死別したため一人で働いて3人の子供を育て上げた方であった。インタビュアーには同意が得られたAさんのケアを担当している看護師の協力を得た。

3) 教材とするインタビューの収録

インタビュー収録は、Aさんの希望する日時に施設の一室を借り、本人の希望で家族の同席のもと実施した。Aさんの緊張を解くため

に事前に研究者や撮影スタッフとの顔合わせを行い、研究者は数回訪問しAさんと関係を作った。また、研究協力者の看護師とも打ち合わせを数度行いAさんに合ったインタビューの進め方を検討した。Aさんは緊張で体調を崩すことがある方であったため、インタビュー内容を事前に打合せず、インタビュアーが話題提供しその時話したいことを語ってもらう形式でインタビューを行うこととした。収録は、Aさんを囲む形でインタビュアーに加えて家族、研究者もテーブルにつき、お茶を飲みながら話をする形で実施した。Aさんは、過去に苦勞した事、頑張った事よりも過去、現在の楽しかったエピソードを、個人名や場所など具体名を出して語られた。インタビュアーが幾度か昔の苦勞について話題を投げかけたが、Aさんは「大変だったね」「頑張ったね」と言われたが多くを話されなかった。

4) DVD 試作版の編集

収録されたインタビューは56分で、会話を逐語化し、研究者らで看護援助を考えるために、Aさんの語りが現在のAさんを理解する手がかりとなるかどうかを検討してDVD試作版の内容を決定した。個人情報保護の観点から実名等が語られた会話は除外し、かかわりのある人や人生、生活に対するAさんの思いの語りを可能な限り採用した。Aさんは様々な話題を入り交ぜて話されたため、時系列で語られた話題ごとに、Aさんの語りの文脈が変わらないように配慮して語りを編集した。結果としてDVD試作版にはAさんの語りの約半数が用いられた。

DVD試作版は、Aさんが語った内容から、「今の生活をどう思うか」、「一番楽しいこと」、「生まれた時、幼少時のこと」、「十代の時の思い出」、「夫を亡くした後の生活」、「人生で一番頑張った時」、「今の生活が楽しい理由」、「今、望むこと」、「もし昔に戻れるとしたら何歳がいいか」、「76才をどんな年にしたいか」、「自分の人生をどう思うか」の11の話題で構成し、12分の教材とした。DVD試作版でのAさんの主要な発言内容を表1に示した。会話のうち発音

が不明瞭な部分や方言で聞き取りにくい部分には字幕を入れ、働き始めた年齢や結婚した年齢、子供の人数などインタビュー時に語られなかった、あるいはDVD試作版に採用できなかった語りに含まれた事実的内容をナレーションで補足した。また、映像にはAさんと家族から提供をうけた幼少時から現在までの写真を入れた。生活史に関する説明は、冒頭に、「高齢期を生きる方を理解するためには、その方が生きてきた歴史や経験が手がかりとなります。これまでの人生が今の生き方や思いにどのようにつながっているのかを考えながら鈴木さん(仮名)の話をきいてみましょう」というナレーションを入れた。

4. データ収集方法

教材DVDは、2年次の科目での活用を想定していたため、対象者の1年次の科目履修がほぼ終わる2015年1月に調査を実施した。講義終了後の時間帯に、講義室でDVD試作版を上映し、視聴後に自記式質問紙調査を実施した。対象者へは生活史と高齢者理解に関する知識提供は実施せず、生活史を用いた高齢者理解のための教材であることを説明してDVD試作版を上映した。調査票は、教材の内容の適切さとして、DVD試作版がわかりやすい内容であったか、関心を持てるものであったか、また、高齢者理解と看護の視点で情報を捉えられたかを見るために、高齢者理解と重要と思う高齢者ケアの設問で構成した。

1) 調査項目

(1) 個人属性

性別、年齢、祖父母との同居経験の有無、および高齢者と接する機会を「1. よくある」から「4. ない」までの4段階の選択肢で回答を求めた。

(2) DVD試作版の時間

DVD試作版の時間の適切さは「1. 適切だった」から「5. 適切ではない」までの5段階の選択肢で回答を求めた。「4. あまり適切ではない」「5. 適切ではない」と回答した場合には自由記載欄への記入を求めた。

表1 DVD 試作版の内容

話題	語りの例
今の生活をどう思うか	「今はここにお世話になっているのが一番いい人生です」 「みんないいから、看護婦さんたちが」
一番楽しいこと	「一番楽しいのはカラオケだね。カラオケやってる時が一番楽しい」
生まれた時、幼少時のこと	生家の家業について、兄弟について
十代の時の思い出	「19才の時に初恋したの（中略）でも初恋だから続かなかったね」
夫を亡くした後の生活	「私は泣いてる暇ないから、どこでも働かなくちゃってことで」 「この真ん中の指曲がってるんだけど（ずっと箱詰めの仕事して）これ曲がっちゃった」
人生で一番頑張った時	「私が一生懸命頑張らなきゃいけない時期があった。旦那死んでから。」 「誰もいなくちゃ、子どもたちが育たないから。だからいるんなとこで働いたわけ」
今の生活が楽しい理由	「周りの人がいいからじゃないかな、うん」 「みんな仲良くやってるから」
今、望むこと	「上げ膳据え膳だかんねえ。（中略）今はこれが一番満足なんじゃないかな」 「今丈夫でいるから、ここにいることは昔働いたり何かしたおかげだと思ってるんですよ」 「でも歩くのにちょっと足びっこひくんだよね」「今は自転車も乗れないわ」
もし昔に戻れるとしたら何歳がいいか	「30代だね」「一番元気がいい時期。動けるから」 「戻ったとすればまだ若いから何でもできる」 「(戻ったら) 一生懸命働いて恋をしたいね」
76才をどんな年にしたいか	「やっぱり健康でみんなと仲良くやっていければいいかな。ここにいる限りはそれが一番だね」 「(お正月もクリスマスも家に行かない) 家に行くと世話かけるからね」「お世話になるのは辛いわね」「家に行っても今仕事がないから、ご飯作りは娘が作るし。（中略）ここにいた方がいい」
自分の人生をどう思うか	「100まで生きられたら最高だな、なんて思って」 「(100まで生きたら何がしたいか?の質問に)100までな、何ともわかんないね、生きてみなきゃ」

(3) DVD 試作版の内容

DVD 試作版が高齢者を理解するためにわかりやすい内容であったかを、「1. わかりやすい」から「5. わかりにくい」の5段階の選択肢で回答を求めた。また、DVD 試作版が高齢者および高齢者看護に関心を持てる内容であったかを「1. 関心をもてた」から「5. 関心をもてない」までの5段階の選択肢で回答を求めた。回答選択肢のうち4および5段階の評定に回答した場合には自由記載欄への記入を求めた。

(4) 高齢者理解と重要と思う高齢者ケア

高齢者について理解したこと、高齢者ケアに重要と思ったことについて、DVD 試作版のどの語りから思ったのかを合わせて記述を求め

た。

5. データ分析方法

Aさんの語った内容から、施設での生活を現在の語り、施設に入る前までの生活を生活史と捉えることとした。DVD 試作版の時間と内容に関する回答は単純集計で傾向を捉え、自由記載内容は記述内容ごとに整理した。DVD 試作版の内容に関するわかりやすさ、高齢者および高齢者看護への関心と、祖父母との同居経験の有無および高齢者と接する機会との関連をFisherの直接確率検定を用いて検討した。DVD 試作版の内容に関する回答は、5段階評定のうち、1および2段階の評定と3から5段階の評定でカテゴリーの併合を行い、内容のわ

かりやすさは、「わかりやすい」、「わかりにくい」の категория、高齢者もしくは高齢者看護への関心は「関心をもてた」、「関心をもてなかった」の категорияとし、解析した。

また、DVD 試作版に収載した語りが高齢者理解と高齢者ケアを考えるために有用であったかどうかを確認するために、高齢者理解と重要と思う高齢者ケアに関する記述内容で、DVD 試作版からの引用が明確であった記述を対象に引用状況を検討した。高齢者理解および重要と思う高齢者ケアに関する記述は、内容分析を実施してカテゴリー化し、記述内容における生活史の活用状況を検討した。

6. 倫理的配慮

インタビュー協力者の高齢者と家族、および看護師へは、教材 DVD の使用範囲が研究者の授業での使用に限ること、氏名は仮名とし、本人が特定されないように配慮することを説明し、同意を得た。撮影時は協力者の疲労に注意し、語りたことだけを語ってもらえるように配慮した。また、高齢者、家族、看護師には調査実施前と調査後の2度編集内容の確認を受けた。学生へは協力しない場合も成績には影響しないことを説明し、学習への影響を最小限とするため、調査を授業終了後の時間帯に実施した。本研究は獨協医科大学看護研究倫理委員会の承認を受けて実施した（受付番号：看護 26013）。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の属性

対象者は女性 15 名男性 1 名の 16 名で、平均年齢は 18.8 才であった。祖父母との同居経験がある者は 9 名（56.3%）で、高齢者と接する機会がよくある者 8 名（50.0%）、時々ある者 9 名（37.5%）であった。対象者の 47.3% に祖父母との同居経験がなかったが、87.5% の者が高齢者と接する機会をよくある、時々あると回答しており、本研究の対象者は高齢者との接点のある者が多い特徴があった。

2. DVD 試作版の時間と内容の適切さ

DVD 試作版の時間が適切と回答した者は 13 名（81.3%）、やや適切と答えた者は 2 名（12.5

%）で対象者の 93.8% が適切、やや適切と評価していた。DVD 試作版が高齢者へ関心を持てる内容として適切と答えた対象者は 5 名（31.2%）、やや適切と答えた対象者は 9 名（56.3%）で、87.5% の者が高齢者へ関心をもてるものと捉えていた。また、高齢者看護へ関心を持てる内容として適切と答えた対象者は 6 名（37.5%）、やや適切と回答した対象者は 4 名（25.0%）で、62.5% の者が高齢者看護に関心を持てる内容と評価していた。しかし、高齢者を理解するためにわかりやすい内容かどうかに関しては、適切と答えた対象者は 3 名（18.7%）、やや適切と回答していた者は 5 名（31.3%）で、わかりやすいと捉えた対象者は 50.0% であった（表 2）。祖父母との同居経験の有無と DVD 試作版の内容のわかりやすさ、高齢者および高齢者看護へ関心を持てる内容かどうかの回答には有意な関連を認めなかった（表 3）。また、高齢者と身近に接する機会の回答を、「よくある」「ときどきある」を「あり」群、「あまりない」「ない」を「なし」群として分析した結果、高齢者と身近に接する機会の有無と、DVD 試作版の内容のわかりやすさ、高齢者および高齢者看護へ関心を持てる内容かどうかの回答には有意な関連を認めなかった（表 4）。

自由記載には 27 の意見がみられ、22 意見は画面の見やすさ、音声の聞きとりやすさについての意見で、5 意見は DVD の内容、構成等に対する意見であった。画面、音声、字幕の修正が必要という意見が 16 みられ、具体的には高齢者の声の聞き取りにくさ、ナレーターの言葉の発音、インタビューの会話とナレーションの音量のバランスの悪さ、字幕の挿入箇所や字の大きさに対する意見であった。

3. 高齢者理解、重要と思う高齢者ケアに関する記述における A さんの語りの引用状況

高齢者理解に関する記述は 39 で、そのうち A さんの言動を引用していた記述は 26 であった。また、重要と思う高齢者ケアに関する記述は 25 で、A さんの言動を引用していた記述は 13 であった。言動の引用がみられた計 39 記述のうち「昔の自分を語ること」、「昔の事を語る

表2 DVD 試作版の時間・内容についての回答結果

n = 16		
項目	カテゴリー	度数 (%)
DVD 試作版の時間	1. 適切だった	13 (81.3)
	2. やや適切だった	2 (12.5)
	3. どちらともいえない	1 (6.2)
	4. あまり適切ではない	0 (0.0)
	5. 適切ではない	0 (0.0)
高齢者を理解する学習のために わかりやすい内容か	1. 適切だった	3 (18.7)
	2. やや適切だった	5 (31.3)
	3. どちらともいえない	6 (37.5)
	4. あまり適切ではない	2 (12.5)
	5. 適切ではない	0 (0.0)
高齢者へ関心をもてる内容か	1. 適切だった	5 (31.2)
	2. やや適切だった	9 (56.3)
	3. どちらともいえない	2 (12.5)
	4. あまり適切ではない	0 (0.0)
	5. 適切ではない	0 (0.0)
高齢者看護に関心をもてる内容か	1. 適切だった	6 (37.5)
	2. やや適切だった	4 (25.0)
	3. どちらともいえない	5 (31.3)
	4. あまり適切ではない	1 (6.2)
	5. 適切ではない	0 (0.0)

表3 DVD 試作版の内容の回答と高齢者との同居経験の有無での比較

n = 16				
項目	カテゴリー	祖父母との同居 経験あり (%)	祖父母との同居 経験なし (%)	P 値
内容のわかりやすさ	わかりやすい	4 (44.4)	4 (57.1)	1.000
	わかりにくい	5 (55.6)	3 (42.9)	
	合計	9 (100.0)	7 (100.0)	
高齢者への関心を持 てる内容か	関心をもてた	7 (77.8)	7 (100.0)	0.475
	関心をもてなかった	2 (22.2)	0 (0.0)	
	合計	9 (100.0)	7 (100.0)	
高齢者看護への関心 を持てる内容か	関心をもてた	5 (55.6)	5 (71.4)	0.633
	関心をもてなかった	4 (44.4)	2 (28.6)	
	合計	9 (100.0)	7 (100.0)	

Fisher の直接確率検定 (両側検定)

ときの表情」などの引用された A さんの語り
が明確に特定できない 4 記述を除外した 35 記
述を対象として、引用が DVD 試作版のどの話
題での語りであったのかを分析した。結果、「生
まれた時、幼少時のこと」を除く全話題から
A さんの語りが引用されていた (表 5)。

4. DVD 試作版の視聴から捉えた高齢者理解
39 記述を分析した結果、22 記述内容で構成
される 6 カテゴリーがみいだされた (表 6)。
カテゴリー名を【 】, 記述内容を [] で示す。
対象者は、「足を引きずるようになった」「自
転車にも乗れない」という語りから A さんが
[自分の体調や老いを捉えている], 30 代に戻

表4 DVD 試作版の内容の回答と高齢者と接する機会の有無での比較

n=16				
項目	カテゴリー	高齢者と接する 機会あり (%)	高齢者と接する 機会なし (%)	P 値
内容のわかりやすさ	わかりやすい	6 (42.9)	2 (100.0)	0.467
	わかりにくい	8 (57.1)	0 (0.0)	
	合計	14 (100.0)	2 (100.0)	
高齢者への関心を持 てる内容か	関心をもてた	12 (85.7)	2 (100.0)	1.000
	関心をもてなかった	2 (14.3)	0 (0.0)	
	合計	14 (100.0)	2 (100.0)	
高齢者看護へ関心を 持てる内容か	関心をもてた	8 (57.1)	2 (100.0)	0.500
	関心をもてなかった	6 (42.9)	0 (0.0)	
	合計	14 (100.0)	2 (100.0)	

Fisher の直接確率検定 (両側検定)

表5 高齢者理解および重要と思う高齢者ケアの記述における A さんの語りの引用状況

	高齢者理解の記述 (n=28)	重要と思う高齢者ケアの記述 (n=13)
今の生活をどう思うか	引用あり	引用あり
一番楽しいこと	引用あり	引用あり
生まれた時, 幼少時のこと	-	-
十代の時の思い出	-	引用あり
夫を亡くした後の生活	引用あり	-
人生で一番頑張った時	引用あり	引用あり
今の生活が楽しい理由	-	引用あり
今, 望むこと	引用あり	引用あり
もし昔に戻れるとしたら何歳がいいか	引用あり	引用あり
76 才をどんな年にしたいか	引用あり	引用あり
自分の人生をどう思うか	引用あり	-

りたいという話や「丈夫だからよい」「100歳まで生きたい」という言葉から A さんが〔健康で過ごせることに感謝している〕など, A さんの【健康・自立に対する思い】を捉えていた。また, 「今が楽しい」「カラオケが好き」などの言葉から〔施設での生活を楽しみ, 満足している〕と捉えるだけでなく, 「家にいてもやることがない」「施設は良くしてくれるから満足」「家では仕事がない」という言葉から, 「家を離れる, 援助を受けることをあまり気にしていない」〔家族の中での自分の存在について考えている〕と【今の生活に対する思い】を捉えていた。

加えて対象者は, A さんの生き生きした表情から〔昔の自分について話すことが好き〕, 子供を残して夫が他界した後, 「働かなきゃだめ」, 「泣いていられない」と考えた点に〔子育てに対する責任感や強さがあった〕と捉え, 30歳に戻れるならたくさん働いて恋がしたいという言葉から〔高齢でもまだ希望を持っている〕と A さんの【好みや態度, 活力】を捉えていた。また, 対象者は, A さんが大切な人を守るため, 自分のためにも〔様々な人とかわりながら生きてきた〕, 「生きるために働かねばならなかった」という【これまでの生き方】を捉えていた。以上の4カテゴリーは, 対象者が A さんの言

表6 Aさんの語りから高齢者について理解した内容

カテゴリー	記述内容
健康・自立に対する思い	記憶がしっかりしている
	自分の体調や老いを捉えている
	健康に過ごせることに感謝している
	健康で自分で何かできる生活を望んでいる
	周囲に世話や迷惑をかけたくないと思っている
今の生活に対する思い	体力や元気のあった昔の方がよかったと思っている*
	施設での生活を楽しみ、満足している
	昔頑張って働いたから今満足している*
	家を離れる、援助を受けることをあまり気にしていない
好みや態度、活力	家族の中での自分の存在について考えている
	高齢でもまだ希望をもっている
	昔の自分について話すことが好き*
これまでの生き方	趣味などがあると生き生きしている
	子育てに対する責任感や強さがあった*
	苦勞して生きてきた*
	生きるために働かねばならなかった*
自分や自分の世代との違い	様々な人とかわりながら生きてきた*
	家族の存在によって苦勞を乗り越えた*
自分とは違う考え方	自分とは違う生活をしていた*
	世代を問わず同じところがある
自分とは違う考え方	家族より第三者の支援を受ける方が幸せなのか疑問
	大変だった時に自分は同じように前向きには考えられない

注：*をつけた記述内容は、生活史の語りを引用していたデータが含まれた記述内容

動を解釈して理解しようとするものであった。

また、対象者は、「恋をしたい」などの語りから自分達と一緒に意欲にあふれていると〔世代を問わず同じところがある〕、中学卒業後仕事に就いたAさんに対し〔自分とは違う生活をしていた〕と【自分や自分の世代との違い】を捉えていた。加えて、対象者は、〔家族より第三者の支援を受ける方が幸せなのか疑問〕、過去大変だったことを前向きに捉え100歳まで生きるという語りに〔大変だった時に自分は同じように前向きには考えられない〕と【自分とは違う考え方】を捉えていた。これらの2カテゴリーは、対象者が自分の考えや生活状況を基準に理解しようとするものであった。

5. DVD 試作版の視聴から捉えた重要と思う高齢者ケア

25 記述の分析の結果、13 の記述内容で構成される8カテゴリーが見いだされた(表7)。カテゴリーを〈 〉、記述内容を《 》で示す。

〈楽しく生き生きと過ごすこと〉では、対象者は、毎日に楽しみを見出していることが必要、楽しく話す、遊ぶ、笑うことが大切、など《楽しさを見いだせ、楽しい思いが持てる生活》や昔の思い出を語ってもらうことが楽しみになるなど《一緒に楽しく過ごすこと》が重要と捉えていた。また、〈役割のある生活〉では、対象者は、活躍できる場や、役に立てる場所にいることが重要、全て他人がやってくれるのではなく役割を与えることも大切などの《役割がある

表7 Aさんの語りから高齢者ケアに重要と思った内容

カテゴリー	記述内容
楽しく生き生きと過ごすこと	楽しみが見いだせ、楽しい思いが持てる生活 一緒に楽しく過ごすこと*
役割のある生活	役割があること 役割ができるような支援
生きる支えとなる多くの人の支えがあること	
思いの共有	夫を亡くした後の決意など思いの共有* 思いを理解、共有しその人の気持ちにより近づいたうえでのケア
その人の歴史や生き方を知る*	
今の望みや意思を聞き、尊重する	
コミュニケーションの取り方	前向きなことを話す 話を聞く態度 あたたかいかかわり方 相手が満足できるコミュニケーション
身体面でのサポート	できなくなることに対するサポート 安全面のサポート

注：*をつけた記述内容またはカテゴリーは、生活史の語りを引用していたデータが含まれた記述内容

こと》、《役割ができるような支援》が重要と捉えていた。加えて、高齢者には特に〈生きる支えになる多くの人の支えがあること〉が重要という記述もみられていた。

加えて、対象者は、夫を亡くした後の思いや時代背景の違い、未来についての〈思いの共有〉や〈その人の歴史や生き方を知る〉こと、〈今の望みや意思を聞き、尊重する〉ことが重要と述べていた。対象者はまた、話す内容や態度、相手が満足できることを考えた〈コミュニケーションの取り方〉、安全面やできなくなることに対する〈身体面でのサポート〉の具体的な援助が重要とも記述していた。

対象者は、DVD 試作版の視聴から、重要と思う高齢者の生活像、対象を理解することの重要性、重要と思う具体的支援を記述していた。

6. Aさんの生活史の活用状況

対象者は、Aさんの生活史から【これまでの生き方】【自分や自分の世代との違い】を捉えるだけでなく、【健康・自立に対する思い】、【今の生活に対する思い】、【好みや態度、活力】

といった現在のAさんの理解においても生活史を活用し、〔子育てに対する責任感や強さがあった〕、〔体力や元気のあった昔の方がよかったと思っている〕、〔昔頑張って働いたから今満足している〕と、Aさんが持つ力や現在の思いを捉えていた(表6)。また、重要と思う看護ケアの記述では、《夫を亡くした後の決意など思いの共有》だけでなく、〈その人の歴史や生き方を知る〉こと、昔の思い出を語ってもらうことで《一緒に楽しく過ごすこと》が重要と、生活史の語りを聞くことの重要性が看護者、高齢者双方の視点から記述されていた(表7)。

IV. 考察

1. 半構成的インタビューによる語りで構成したDVD 試作版の有用性

本研究では、DVD 試作版を、対象者の87.6%が高齢者への関心が持てる内容、62.5%が高齢者看護に関心を持てる内容と評価し、対象者の祖父母との同居経験や高齢者と接する機会の有無が高齢者や高齢者看護への関心に関連しな

い結果を得た。また、高齢者理解と高齢者に重要と思うケアに関する記述に、「生まれた時、幼少時のこと」を除く DVD 試作版の全話題から引用がみられた結果を得た。これらの結果より、対象者は A さんの現在と生活史の語りから刺激されて高齢者理解や高齢者ケアについて考えていたことがうかがえる。加えて、対象者は A さんの【これまでの生き方】を理解するだけでなく、【健康・自立に対する思い】、【今の生活に対する思い】、【好みや態度、活力】という現在の A さんの理解にも生活史を用いていた。本 DVD 試作版は、学生が高齢者へ興味関心をもてる長さで内容であり、作成時に研究者らが意図していた「生きてきた歴史があって高齢者の今があるという高齢者理解」を促進する学習が可能な教材となっていたと考えられる。

本研究での高齢者理解と重要と思う高齢者ケアの分析結果には、身近な高齢者へのインタビューによる先行研究と類似する結果がみられている。本研究で見いだされた「趣味などがあると生き生きしている」、《生きる支えとなる多くの人の支えがあること》は、小泉ら⁴⁾の趣味や生きがいの大切さの学びと類似し、「子育てに対する責任感や強さがあった」という強さの発見は寺門ら⁷⁾の報告に、「苦勞して生きてきた」という高齢者の理解は小木曾ら³⁾の報告にもみられている。また、A さんの言動を解釈して理解しようとする、自分の考えや生活状況を基準に理解しようとする高齢者理解の仕方は、高田ら¹⁶⁾が、身近な高齢者へのインタビュー課題の記述から学生の学びの視点として見出した「高齢者自身による解釈を知る」、「現在の自己と重ねる」と類似するものである。他者によるインタビューであっても高齢者の語りを聞くことで、対象者が高齢者へのインタビュー課題と類似した高齢者理解をしていた結果は、DVD 試作版の視聴による学習が、既存の方法と同様に効果があることを示唆している。

本研究では DVD 試作版の作成に A さんが語りたことを語る半構成的インタビューを用いたことで、過去の苦勞した時の語りが少ない内容となった。しかし、対象者は A さんの語

りから「苦勞して生きてきた」と過去の生き方を感じ取っており、A さんの語りは、詳細ではなかったものの過去に苦勞をしてきたことを伝える内容となっていたことがうかがえる。DVD 試作版は、詳細な体験が含まれなかったことによって、A さんの語りから具体的な生活史を知ることよりも、苦勞があったであろう過去の出来事をなぜ A さんは多く語らなかったのかを他の語りから考え、A さんの心情を探る教材となりうると考える。また、高齢者が多くを語らない状況は、今後学生が看護実践で経験する状況であることから、DVD 試作版は、入手できた生活史情報から A さんの生き方を考え、さらにどのようにコミュニケーションをとりながら高齢者を理解していくとよいのかを、実践的に考える教材としても活用可能であると考えられる。身近な高齢者へのインタビュー課題による学習は座学では得られない学びを含むものであり、DVD 試作版を用いた授業がインタビュー課題の学習に代わるものではない。DVD 試作版は、インタビュー課題や実習で高齢者と接する学修の前段階の講義・演習において、看護実践に生活史を活用する能力の実践的な育成のための事例教材として有用であると考える。

2. 生活史を活用した対象理解を深める学習における DVD 試作版の活用可能性

本研究では、高齢者理解に関する記述結果に【自分や自分の世代との違い】、【自分とは違う考え方】という、対象者が自分の考えや生活状況を基準に高齢者を理解しようとする捉えがみられた。この捉えは、対象者が今まで当然と思っていた考えや価値とは違う人がいることに気づいたが、その人の理解には至っていない捉えと読み取れる。特に本研究では、「家族より第三者の支援を受ける方が幸せなのか疑問」、「大変だった時に自分は同じように前向きには考えられない」という記述内容が見いだされた。これらの記述内容からは、平均年齢 18.8 才の対象者には 75 才の A さんの価値観や考え方を受け止めきれていない状況があることがうかがえる。しかし、このような受け止めきれない思い

が、高齢者理解を深める学習のきっかけとして重要であると考える。

Keene¹⁷⁾は、自立的に意味や解釈を作り出す理解の方法として、「関連付ける」「質問する」「イメージを描く」「推測する」「何が大切かを見極める」「解釈する」「修正しながら意味を捉える」という7つの方法を示している。Keeneは読み書きの理解として上述した方法を提示しているが、すべての生活の側面で用いることが可能な方法であるとも述べている。〔家族より第三者の支援を受ける方が幸せなのか疑問〕と考えた対象者の学習行動は、Aさんの言動を自分の生活体験や価値観と「関連付ける」方法での理解と考えることができる。この捉えをきっかけに、対象者がさらに考えを深めた場合、Aさんのこれまでの家族との関係、健康や自立に対する価値観、子供に対する思いを「関連付け」Aさんの「イメージを描く」ことで、生活史も含めて多角的に高齢者を「解釈する」理解にすすむこともできるだろう。学習メディアは繰り返し再生、分析が可能な固定性、多くの学生と共有できる拡充性がある¹⁸⁾。DVD試作版は、講義・演習の事前学習として視聴による個人学習をもとに授業を行い、学習メディアの利点を生かして、授業で再生し振り返りながら多角的に高齢者を理解できるような取組みにおいて、効果的に活用可能であると考えられる。

本研究では看護の視点からAさんの語りを捉えられるかどうかをみるために重要と思う高齢者ケアに関する記述も求めた。分析の結果、1年次生の対象者がDVD試作版の視聴から看護を考えることができていたことが確認されたが、高齢者理解に関する記述数39に対して25と少ない結果であった。高齢者看護への関心を持つ内容と回答した者が6割にとどまった結果を合わせると、今回研究対象とした1年次生が個人でDVD試作版の視聴から看護援助を考えるという課題は難易度が高かった可能性がある。初学者への教材DVDの活用の際には、学生の準備状態を考慮することが必要である。

3. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、対象者が16名であったこ

と、また高齢者と接する機会のある者が多い集団での結果であったことである。高齢者と接する機会のない1年次生では、Aさんの言動の捉え方やDVDのわかりやすさの捉えが異なる可能性がある。また、学生の記述内容には、音声の聞き取りくさなどの編集上の問題が学生の回答に影響した可能性がある。DVD試作版は、調査結果より収録内容は変更せずに音声の調整や字幕の追加等の再編集を行って完成させることとしたが、今後の課題として、教材DVDをより有効に活用できるプログラムの作成と、プログラム評価として高齢者理解に関する評価方法の検討が必要である。

V. 結論

生活史を活用した高齢者理解を学ぶための視聴覚教材としてAさんへの半構成的インタビューによって作成したDVD試作版の有用性を検討することを目的として、1年次看護学生16名にDVD試作版の視聴後に自記式質問紙調査を実施し、以下の知見を得た。

1. DVD試作版を、対象者の87.5%が高齢者への関心を持つ内容、62.5%が高齢者看護に関心を持つ内容と評価し、対象者の祖父母との同居経験、高齢者と身近に接する機会の有無との関連を認めなかった。
2. DVD試作版が高齢者および高齢者看護に関心を持つ内容と6割以上の者が評価し、高齢者理解と重要と思う高齢者ケアの記述では、生まれてから幼少時の時期のものを除くDVD試作版の全話題から引用がされていた。
3. 対象者がDVD試作版の視聴から捉えた高齢者理解の内容は、【健康・自立に対する思い】【今の生活に対する思い】【好みや態度、活力】【これまでの生き方】というAさんの言動を解釈した理解と、【自分や自分の世代との違い】【自分とは違う考え方】という自分の考えや生活状況を基準に理解しようとする6カテゴリーに集約された。
4. 対象者がDVD試作版の視聴から捉えた重要と思う高齢者ケアの内容は、〈楽しく生き生きと過ごすこと〉〈役割のある生活〉〈生き

る支えになる多くの人の支援があること〉の重要と思う高齢者の生活像、〈思いの共有〉や〈その人の歴史や生き方を知る〉〈今の望みや意志を聞き、尊重する〉と対象を理解・尊重すること、〈コミュニケーションの取り方〉〈身体面でのサポート〉の重要と思う具体的支援が記述され、対象者は、Aさんの語りを看護の視点で捉えていた。

5. 半構成的インタビューによる語りで構成したDVD試作版は、限られた生活史情報から高齢者を理解する実践的な能力を育成する事例教材として有用であると考えられた。また、DVD試作版視聴による個人学習をもとに授業を行う取組での活用可能性が示唆された。

謝辞

本研究実施にあたり、教材作成にご協力いただきました施設の皆様、協力いただいた高齢者とご家族、看護師の方々、ならびに調査にご協力いただきました学生の皆様に感謝致します。本研究は、平成26年度獨協医科大学看護学部共同研究費（領域研究）の助成を受け実施したものである。

文献

- 1) 中西睦子監修：老人看護学 TACS シリーズ7(初版), 13, 建帛社, 東京, 2003.
- 2) 木下康仁：老人ケアの人間学(第1版), 医学書院, 東京, 1993.
- 3) 小木曾加奈子, 安藤邑恵：看護学生における高齢者理解—ライフストーリーのインタビューを基にした内容分析—, 教育医学, 55(3), 283-292, 2010.
- 4) 小泉美佐子, 伊藤まゆみ, 他：老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果, 老年看護学, 5(1), 140-146, 2000.
- 5) 櫻井清美, 尾島喜代美：ライフヒストリーインタビューを在宅高齢者に行った看護学生の思い—情意領域の学習効果—, 日本看護学会論文集, 地域看護, 44, 192-195, 2014.
- 6) 伊藤良子, 大町弥生, 他：成人期・老年期にある対象の理解—インタビューを行った看護学生の学び—, 藍野学院紀要, 20, 25-36, 2006.
- 7) 寺門とも子, 大塚邦子, 他：高齢者理解のための効果的な学習方法—看護学生の個人史インタビューによる人生観・健康観の学び—, 老年看護学, 7(1), 88-94, 2002.
- 8) 大内澄江, 今井弥生, 他：高齢者インタビューから見た看護学生の高齢者への気づき—学生の高齢者理解へのプロセスを知る—, 日本看護学会論文集老年看護, 41, 160-163, 2011.
- 9) 森仁実, 松下光子, 他：「生活歴の聞きとり体験」による対象理解に関する学びの内容, 岐阜県立看護大学紀要, 2(1), 111-116, 2002.
- 10) 厚生労働省：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, 2015-12-22, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y.html>.
- 11) 古城幸子, 木下香織：高齢者理解を広げる映画教材の教育効果, 新見公立短期大学紀要, 28, 1-6, 2007.
- 12) 小山敦代, 石鍋圭子, 他：「老年に関する映画」の教材化検討 14本の映画鑑賞とディスカッションを通して, 看護教育, 49(5), 428-433, 2008.
- 13) 佐藤光年, 川島珠実, 他：メディア教材は, 学生の高齢者理解を深めることに効果的か—ビデオ教材を用いた学習の実践を通して—, 四日市看護医療大学紀要, 3(1), 1-7, 2010.
- 14) 渡辺弥生, 伊藤豊美, 他：看護学生の高齢者理解のための取り組み—戦争体験している高齢者に焦点を当てて—, 日本看護学会論文集, 老年看護, 33, 205-207, 2002.
- 15) 中野卓, 桜井厚：ライフヒストリーの社会学(初版), 52-54, 弘文堂, 東京, 1995.
- 16) 高田由美, 佐藤美恵子, 他：高齢者理解における学生の学びの視点に関する研究, 日本赤十字秋田看護大学紀要, 19, 1-8, 2014.
- 17) Keene, E. O./山本隆春, 吉田信一郎：理解するってどういうこと? 「わかる」ための方法と「わかる」ことで得られる宝物(初版), 1-18, 新曜社, 東京, 2014.
- 18) 藤岡完治：看護教員のための授業設計ワークブック(第1版), 108, 医学書院, 東京, 1994.